

企業名： クレディセゾン

レポート名： 「クレディセゾン 統合報告書 2025」

1. この会社が目指す姿が理解できるか（将来）

統合レポートは会長や社長、副社長のメッセージから始まり、経営理念や自社のあるべき姿、課題などが示されている。その中で、クレディセゾンの社会的存在価値は、人々の生活を豊かにし、社会インフラとしての金融の姿を創ることだと述べられている。また、クレディセゾンは、単なるクレジットカード会社から「総合生活サービスグループ」への構造転換を図っている。特にグローバル事業は、国内のペイメント、ファイナンス事業に次ぐ第三の収益柱として位置づけられており、将来的な成長戦略として、インド市場で確立したビジネスモデルをブラジルやメキシコなどの新興国へ展開させる方針が明確に示されている。ほかにも「中期経営計画書」や「CSAX 戦略」では、数値面での目標も掲げられており、同社が目指すグローバル金融企業としてのビジョンは十分に理解可能である。

2. この会社の競争優位性が理解できるか（現在）

中期経営計画 2 年目の戦略方針として、インド事業拡大とインドモデルの水平展開が示されている。これは、インドで成功した事業構築のプロセスを自社の再現性のあるモデルとしてとらえており、グローバル展開においての競争優位性の要因となると考えられる。事業戦略についての記載では、投資事業とグローバルな融資事業のシナジーを図っており、優位性につながることが読み取れる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか（変化）

インドモデルの水平展開については、クレディセゾンならではの DNA を現地のメンバーに根付かせ、それを仕組み化して再現性のあるものにしていく旨が明記されている。また、各国拠点が一体感を持つために、Mission・Vision・Values を明文化して浸透させている点も、組織としての持続性を高める要といえる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

クレディセゾンは「夢中力」を備えた人材の育成を推進し、挑戦を促す風土づくりに取り組んでいる。有価証券報告書でも人的資本に関する戦略が明記されており、年齢を問わず挑戦できる環境が整備されている。特にグローバル領域では、事業開発や投資の最前線において、現地の金融規制やリスクと向き合いながら裁量を持って経験を積むことが可能である。財務会計、リスクマネジメント、事業戦略立案

•

といったビジネススキルを総合的に向上させる場として、自身の人的資本価値を十分に向上させることができると考える。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

よかった点：定性的なビジョンだけでなく、戦略や競争優位性等について定量的なデータで裏付けている点がいい点と思う。

改善余地：ROIC をセグメント単位で開示してくれていたらいいなと感じた。